

秀吉の愛情、其勢力を記し、第十章に於て北政所と淀殿との關係にては貞淑にして人望ありし北政所と、醜聞を傳へられた淀殿との間に自ら抗争の生ぜしは自然の數にして、閨中黨を立て關ヶ原役の誘因たりし事否むべからずと言へり。第十一章太閤の同胞にては太閤の異父弟秀長、姉日秀、妹南明院夫人の事蹟を略述し第十二章小早川秀秋にては北政所の弟たる彼が隱然として太閤の後繼者を以て目せられしに、出で、小早川隆景の後を繼ぎ、朝鮮再征の主帥に任ぜられながら、驚鈍にして、暴慢なる彼は、隆景の舊制に違ふ事多く、關原役には終に家康に應じて西軍潰敗の種を播きしは全く北政所の指示に依れるならんと推定す。第十三章緒論に於て、秀吉は政略上父を顯はさざりしも、其祖先に對しても父に對しても相當に奉仕せし事、養子相顔で曉れ、家庭の主人としての不運を認め、家族に對して寬嚴其宜きを待たるも、なほ淀殿を溺愛せし事を指摘して彼は理性の人に非ずして情の人なりと斷じ、太閤の同情を惹く所以亦こゝにありと結ぶ。三五版三百頁餘の小冊子ながら、よく太閤の内の生活を叙説し、加ふるに隨所に畫像、筆蹟、墓所等の寫眞三十五葉を挿入したれば讀過の際無限の感興をそゝるを覺ゆ。(日本學術普及會發行、定價一、八〇)〔中村〕

●元祿時代觀●

文學士 中村孝也著

本書目次記する所、元祿時代の地位、町人階級の勃興、元祿寶永の政局、元祿寶永度の金銀貨改鑄、元祿寶永前後の世態、元祿時代の文藝、ケンヘルと元祿時代あり。著者は元祿時代を以て近世文化史上の最高潮期なりとして、文運の隆興、藝技の昌榮と濃艶豪快の氣尚と應揚寛濶の世相を讚美せんとしたるが如し、著者は此くの如き時代の開展は幕府政治の成立を安全ならしむべき重要問題、即ち對外、財政、朝廷及諸侯並に溷人に關する諸種の問題が何れも此時代に於て解決せられたるに因由するものとし、且つ此時代の特殊の色彩には町人階級の勃興ありて、大に江戸の如き大都市の發達、武家と町人の接觸等を見るに至り、政治の方面にては政治家の個性と政局の推移に論ずべきものありとし、一般世態に就いては敵討游廓の繁昌情死の流行より浮世草紙淨瑠璃、講界の狀況等を詳説し、時代の國民生活を論ぜり。本書もと讀者と共に史興を樂まんとして、著者の筆を走せしものと其自序に記する如く、其敘述に於ては必しも精選琢磨を経たるものと云ふにあらず、繁簡に於て人考ふる所を異にすべしと雖も、而も行文興趣あるに力めて著者感興の來往觀る如く、又一般讀書界の讀物として薦むべきものなるべし。(啓成社發行、價二、八〇)〔西田〕

●神祇史綱要●

宮地直一著

本書は著者が昨年四月東京文科大學に於ける公開講義の手に

多少の修正を加へたるもの、序説には神祇史の意義、時代區分、及び各時代の特色を掲げ、第二上代に於て氏神の起源、神社成立の順序、大化改新が古來の風儀を存せし事を説き、第三外來思想との交渉には、儒佛二教及陰陽道との交渉を觀察して、神佛習合説の起因に山林抖擻の風の看過すべからざるを指摘し、第四平安朝には、此時期に代りて現はれし神、延喜の制、二十二社の發生を説き、神社の社會的發達に關しては、その領地の廣大、神人衆徒の發生によりて社會の一勢力となり、交通機關、都市の發達に資せし事を注意し、第五鎌倉時代に於ては、武家の敬神を以て治國の要道とせし事より、承久、弘安兩役に於ける社家の活動を叙し、第六室町時代にては、怨靈の咎殃を恐れし思想界の傾向を記し、諸社寺の經濟上の基礎を説明し、第七織豊時代には、秀吉の大社家に對する方針は、其所領を收めて古來蓄積せし實力を亡失せしめんとせりと云ひ、第八鎌倉及び室町時代に於ける神道説の發達に關しては、習合説の完成と共に通俗的に布衍したる試みありしを示し、兩部神道、御流神道、伊勢神道、吉田神道、法華神道等の興隆せし趨勢を講述し、從來の僧者社職の兩派の外更に神祇を主とする傾向を生ぜりとし、第九第丁江戸時代にては、朱印地の地方分布より次で之を他に神社神祇の管理、神道説囃起の概況を述べ、智識階級の要求に應ずべき儒家神道の外、極めて卑近なる形式の下

に發現せし修驗道、富士講、御嶽行者に注意したる等、古來の神祇に關する事項の、發生、消長、陸夷を政治上の事情と社會文化の發展の上より講説したり。本文菊版一八二頁數葉の圖版を挿入し、神事に關する諸表九、索引を添へたり。(明治書院發行、價、一、五〇)〔中村〕

● 滿鮮地理歴史研究報告 第五 東京帝國大學文科大學

本書は收むる所の論文凡て五項、其の一高麗成宗朝に於ける女眞及び契丹との關係(池内宏)は、章を定宗以後の北境經略と成宗の初年の問題、契丹の女眞征伐、契丹の高麗入寇と鴨綠江東の所屬の確定の三段に分ちて論述し、其の二靺鞨考(箭内互)は、緒言、陰山の靺鞨、與安嶺西の靺鞨、敵烈と靺鞨、阻卜と靺鞨、黑靺鞨と白靺鞨、緒言の外に、附録として可敦城考を添へ、其の三北宋の對契丹防備と茶の利用(松井等)は、序説、茶と唐宋の經濟界、唐宋の茶法、北宋初世の權茶法、北宋中世の稅茶法、神宗以後の茶法の各章を立て、其の利用方法を論じ、其の四遼の制度の二重体系(津田左右吉)は、緒言、契丹人の部族制度、漢人の州縣制度、行宮に於ける二重体系、中央政府に於ける二重体系、南面官と契丹人の各章の外に、遼聲氏及び遼室の祖先に關する傳説、耶律氏及び蕭氏、行宮の性質の附論をなす。其の五、鮮初、東北境と女眞との關係(三池内宏)は、前々同よりの續稿にして茲には主として建州